

経済産業省 資源エネルギー庁 新エネルギー対策課長 荒木由季子先生

ご紹介いただきました、経済産業省の荒木でございます。本日、ここに何故呼ばれたかというのを、ご依頼を受けたときにふと考えました。私の現在の仕事は、新エネルギー対策課長ということで、新エネルギーの導入という施策をしているのですが、男女共同参画の施策をやっているわけでもございませぬし、科学技術の方に関わっているわけでもないのですけども、恐らく、産業界の方々との接点が多いということと、私が女性としてこれまで一応ウン十年くらい仕事をしてきたということもあって、個人的にお声がかかったのかな、と思っております。従いまして、組織を代表してご挨拶させていただくというよりは、個人の思いも含めて、第3回のシンポジウムのお祝いの意も込めて、挨拶させていただきたいと思っております。

科学技術分野での女性の活躍をどのように後押ししていくかということについては、色々な議論があるだろうと思っております。それは恐らく、科学技術あるいは産業界の話の中だけではなくて、そもそも、広い意味での男女共同参画をどのように進めていくかという共通の課題もあろうかと思っております。特に女性のライフスタイル、ライフサイクルに合わせて、それを仕事と上手くあわせていくということが非常に難しいという意味では、どの仕事に就こうと共通の課題であるかとは思いますが、今日は、私の若干個人的な話も含めて2つほど、女性が科学技術分野あるいは産業界で活躍していく上で、今後どういう風にしたらいいかということ、大変僭越ではございますが、お話をさせていただきたいと思っております。

一つは、数は力なりということだと思っております。さきほど、日本化学会の村井会長から、理事の一つのポストを女性に割り当てたことに対して、アメリカから色んな話があったということでもございましたけれども、いわゆるクォーター制のような形で、女性の比率の目標を決めてやっていくということについては、賛否両論ございます。もちろん男性の側からもいろいろございますが、女性の中でも特に若い方では、そういうやり方に対して反対のことをおっしゃる方もいらっしゃいます。あるいは、鶏と卵みたいなものであって、女性が少ないのはそもそも母体として女性が入ってこないからだ、そういう少ない女性の中で、理事とか、ある程度のポストを割り振るのはいかなものかという議論も当然あります。ただ、私の実感として、いろんな問題はあつたものの、クォーター制、あるいは目標でも良いけども、そういうものを掲げること自身が俄かに悪いことでは無いとは思っています。女性のその分野における活躍される方の数が増えていくということが、大変な力になるという風に思っています。と言いますのは、私自身工学部の出身でございますが、今は行政官でございますので、何ら科学技術には貢献していないわけですけど、工学部にいた時、当時、学部で一学年1000人いる学生のうち、女子学生は僅か8人でした。別に8人だからといって、何かが不便だったかということ、トイレの数が少ないくらいで、勉強する上で特段、不便では無かったけれど、もっと数が居ると違ったのになあ、という思いを抱いたのは事実でございます。当然、就職する時にもそういう思いはございましたし、そういう意味では、女性の数が増えてくるということが大変大事なことでございます。その

ために色々なことをやらなければいけないと思います。割り当てとか目標についてはいろいろな是非論があるかと思いますが、どういう風に女性の数を増やしていくか、要するに裾野を広げていくかということは、私も考えなければいけないと思っております。その中で、女性が科学技術に向いているかという話があります。私自身子供が2人おりまして、一人は男の子、一人は女の子です。私自身は男女の教育について、家庭のなかで、男女の区別無く育ててきたつもりですが、息子の方は古典・歴史などに興味があり、娘は理科系が好きです。これは、私が工学部だったからというわけでは全然無いと思います。子供を育てている実感として、男の子と女の子の興味は、特段男の子が工学、理科学的なものが好きで女の子が文系が好きというわけでは全く無いのだなあということを実感しました。ただ、この子供の興味がこれから、中学、高校、大学となっていくときにどれだけ、初期に持った自分の興味という物を発展させていけるのだろうかということ、私としては若干気にしております。というのは、笑い話ではありますが、私のアメリカ人の友人で、プラズマ工学を勉強していた女性がおります。彼女とは、私がアメリカのMITに留学した時に親しくさせていただいて、いろんな話をさせていただいたのですが、彼女が言っていた面白いことで、やはりアメリカでもそうかなと思ったのですが、彼女が高校生のときに工学系に進みたいと言っていたのですが、理科系に進むのは女性にとって不利なのよね、と言うんですね。やっぱりアメリカでもそういうことはあるの？就職とか、と思ったら、そうではなくて、男性からデートに誘われにくいというわけなんですね。理工学を目指す女性というのは何となく怖いイメージがあるので、デートに誘われにくくなる。だから、女の子はみな、そういう難しいことはやらずに、何となく文学とか歴史とかそういうところに進んでしまうのよ、と彼女は言っていました。半分冗談だとおもいますが、そういう文化的な部分もあるかと思いますが、実際、個々の家庭の中でも、私も若干そういうことを言われたけれども、女性が理工学系に進むということに関して、親なり親戚なりが、そんなところに進んでどうするの？嫁の貰い手が無くなるよみたいな話があるのは事実でございます。今やそんなことは無いと思いますけれど、そういう文化的な面も私はバカにできないと思います。そういう意味では、子供のもった自分の素朴な科学的な興味を、社会としてどれだけ育てられるかということも、私は関心を持っています。従いまして、さきほど、高校生の女子学生に対するいろんな支援という話もございましたけれども、やはり小学校のときから一貫して大学教育まで、どうやって、女性のそういった関心をエンカレッジできるかということが、私は大変大事だと思っております。

二つ目はリーダーシップの問題だと思っております。女性の社会参加、科学技術の分野にしる、産業界にしる、確かに最近、仕事を続けてがんばっておられる女性が多くなってきている。ただし、色々なデータから、意思決定に関わる立場におられる女性の数というのはやはり非常に少ない。多分、諸外国と比べても非常に少ないといわれていると思います。これも鶏と卵の関係で、女性にそれだけのことを任せられるのだろうかということをはっきりおっしゃられる方が大変多いのですけれど、私自身は、これは、先ほどの教育の話と

も関わるのですが、女性に非常に早い時期からリーダーシップを発揮できる経験をどれだけさせられるかという、こういう社会をつくっていくことだという風に思っております。私自身は、実は中学・高校と女子高にいたのですけれども、アメリカでも女子大の役割というのが、私が留学した時非常に議論になっていたのですけれども、もう女子大の役割は無いんじゃないかと、そういう風に言われている中で、女性ばかりの中で、全て女性がやらなければならないということのなかで自ずと、リーダーシップが涵養されるという側面があるんじゃないかという議論があったのですけれども、私自身もそういうことがあったかなと思っています。やはり女性に対して、失敗しながらも何か重要な仕事、責任のある仕事・役割、こういうものをできるだけ早いうちから経験できるような環境を与えなければ、責任のある仕事をやれと言っても、中々難しいんじゃないかと思っております。従って、科学技術分野、あるいは産業界に於いてもですね、例えば、大学なら大学の学生のと看から、企業であれば企業に入った時から、そういうチャンスというのをいかに女性に作っていくかと言うことを、関係者の方には是非お願いしたいと思っております。私どものような行政官は、ある意味で言うと、国家公務員や地方公務員もそうかもしれませんが、公的な分野の立場の者として、基本的には均等な機会を与えられている、と言う風に思っておりますので、そういった意味で、いろんなチャンスを与えていただいて、当然失敗も沢山してきておりますけれども、そういった中で、色々な経験をして、私にリーダーシップがあるかどうかわかりませんが、そういう経験をすることの重要性を感じておりますので、早い時期から女性に対しても、科学技術分野でも、あるいは産業界でもリーダーシップを発揮できるような、あるいは経験できるようなチャンスを是非作っていただくことが大事だと思っております。ちょっと長くなりましたし、自分の思いがこもってしまいましたが、私としては、その2つを自分の経験の中から申し上げて、大変雑駁ではございますけれどもご挨拶とさせていただきたいと思っております。最後に、このシンポジウムは3回目と伺っております。毎回毎回、こういった形で大変熱心で開催されていることに敬意を表したいと思っております。この開催にあたりましては、関係の方々の皆様方のご努力があったものと思っております。私も本当はこのシンポジウムを全部聞きたいところではありますが、仕事の関係で残念ながら出来ませんが、是非、この結果については後からお話を伺って、私自身の仕事の中でできることをやっていきたいと思っております。本日は盛大なシンポジウムの開催、本当におめでとうございます。